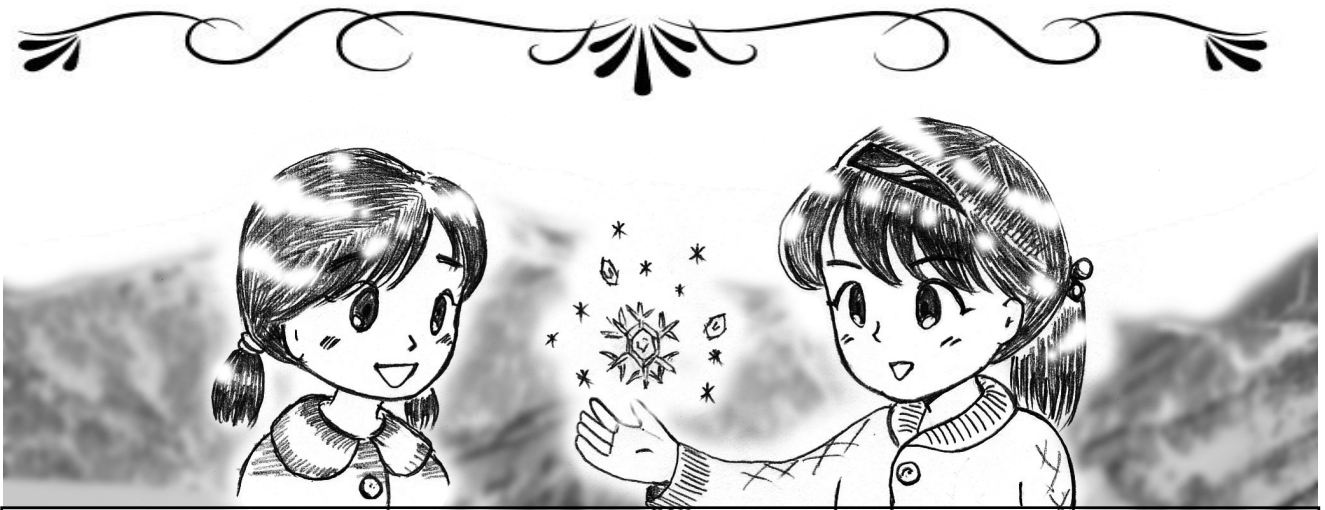


ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～



女性のための防災BOOK

an an 特別編集 マガジンハウス 2014年 (O:その他)

災害はいつ何時やってくるかわかりません。「備えあれば憂いなし」。ライフライン復旧までの自己対応力が、まずなによりも大切になってきます。でも、いま避難リュックに入っているものは、本当に私を助けてくれるの？

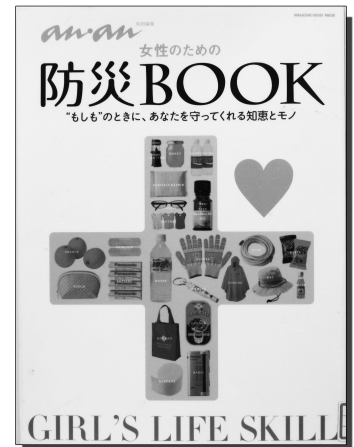
本書は、実際に、被災地のあらゆる女性の方々の話を聞き、「女の人たちが必要としたもの」に焦点があたっています。女性のニーズはとても繊細で、だからこそ、一見、贅沢だと思われてしまいがちです。それをふまえ、形あるものないもの全てを含め、女性だからこそ必要なものを選定。ひとめでわかる形で紹介されています。

活用法は3つ。防災袋を作る指針にする。

支援したいと思った際、送るべきものを知る。そしてイメージトレーニング。非常時に役立つ考え方やものの使い方を知っておけば、いざという時に、その知識が役立ちます。

11月5日は、稲むらの火の南海地震が発生した津波防災の日。少しでも防災に理解と関心を深め、今なお復興に向け、動いている方々に心を寄せたいと思います。

(I.K)



死ぬ気まんまん

佐野洋子 著 光文社 2011年 (K:エッセイ・文学)

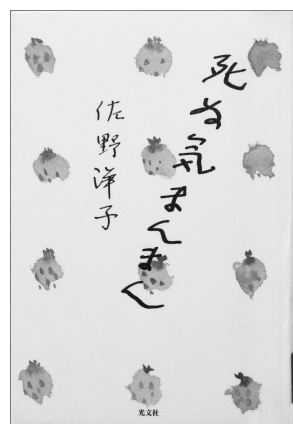
本書には、エッセー「死ぬ気まんまん」の他、主治医との対談、ホスピスでの著者の体験を綴ったエッセー「知らなかった」、関川夏央氏による「『旅先』の人」が収録されている。

死は誰にでも訪れる。それは、今日、いや何秒後かも知れない。そのことを日常はすっかり忘れてしまうのだが、余命宣告を受けた途端、死へのカウントダウンが始まる。絵本『100万回生きたねこ』や数々の名作を生み出した著者は、ガンが再発し余命2年と宣告される。死生観や環境によっても変わってくるが、大抵の人は打ちひしがれて途方にくれると思う。だが、著者

は違う。イングリッシュグリーンジャガーを買って、煙草を吸い続け、大好きなジュリーのコンサートにでかけ5時間81曲を堪能する。あっぱれである。

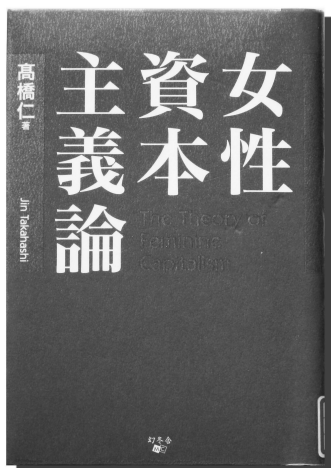
遺作となった本書は著者の生き様が詰まっている。著者の嘘、偽りがない言葉は読み手の心に響く。

素晴らしい本です。ぜひ、読んでみてください。(K)



女性資本主義論

高橋仁 著 幻冬舎メディアコンサルティング 2014年 (B:仕事)



著者はこれまでの資本主義を「おっさん資本主義」と名付ける。キーワードは「狩猟」「開拓」「征服」。「おっさん資本主義」は、様々な面で限界を迎えていると指摘する。この状況を乗り越えるものこそ「女性資本主義」だということである。キーワードは、「信頼」「愛情」「絆」。ただし、「男のやり方はすべてダメだ」と言っているのではない。「おっさん資本主義」ではうまくいかない部分に女性的価値観・資質を生かして考え方や行動

を変えていこうということだ。

著者自身もエステサロンの経営者で、このような考え方でビジネスを発展させてきたのだから説得力がある。話はリーダー論にまで及び、今の時代は「女性的」な資質を備えているリーダーが求められているというデータも紹介している。経済学の基礎的な解説も分かりやすく、為になり、堅いタイトルの割に読みやすい一冊である。

巻末で、この本は男性にこそ読んでほしいと述べ、「女性資本主義」という宝を大切に育てるか、従来の「男性的価値観」のまま無視してやり過ごすかは読者次第だと問いかけている。ビジネス書でありながら、経営の立場から男性の価値観の見直しを迫る男性学の書であると言える気がする。

(O.S)

わすれられないおくりもの

スーザン・バーレイ 作・絵 小川仁央 訳 評論社 2011年 (F:子育て)

「わすれられない おくりもの」ってどんな贈り物なんだろうと素朴な疑問を抱きながら表紙をみると、スーザン・バーレイの繊細で優しいタッチの絵が描かれています。

この絵本はアナグマと動物達のお話です。アナグマはかしくて誰からも頼りにされていきました。しかも大変年をとって、とても物知りでした。アナグマは自分が死んでしまってもあまり悲しまないようにみんなに言っていました。ある日とうとう死んでしまいました。森のみんなはとても悲しましました。アナグマのことばかり考えて泣いていましたが、そのうち雪がふって冬になりました。春がきて外に出られるようになると、みんなでアナグマの思い出

を語り会いました。アナグマはひとりひとりに、別れたあとでも宝物となるような知恵や工夫を残していたのでした。

絵本は子どものためだけにあるのではなくて、大人が読んでも心あたたまり、感動をおぼえるものだということを感じさせてくれる一冊です。この絵本をきっかけに、絵本を読む楽しみを発見される大人も多いのではないのでしょうか。

(花賀)



ほかにもこんな新着図書があります！

書名	著者名	出版社名
ふたりのママから、きみたちへ	東小雪・増原裕子 著	イースト・プレス
流星ひとつ	沢木耕太郎 著	新潮社
プロチチ	逢坂みえこ 著	講談社
緑の毒	桐野夏生 著	角川書店
絶望名人カフカの人生論	フランツ・カフカ 著	飛鳥新社
「ダメな私」に○をする	香山リカ 著	中央法規出版
ぼくだってウルトラマン	よしなが こうたく 著	講談社
オトナ婚です、わたしたち	大塚玲子 著	太郎次郎社エディタス
祖父、ソフリエになる	NPOエガリテ大手前 編	メディカ出版

母性

湊かなえ 著 新潮社 2012年 (K:エッセイ・文学)

今やベストセラー作家の湊氏の作品をみると、この作品にあたった。全体を通してどろどろしているのが、いい作品といえるかどうか謎ではあるが、母娘関係の問題やそこに父親がどうかかわったらいいのか、ということを考えるきっかけとなれば、と思い紹介する。

ある県立高校に通う女子高生が中庭で倒れているのを母親がみつけた。自殺か事故かわからないが、母親の「愛能う限り、大切にそだててきた娘が…」というコメントに疑問をもつ高校教師が出てくる場面と、母親の手記、娘の手記から成り立っている。

「母性」は「自分の生んだ子を守り育てようとする、母親としての本質的性質」と辞書に定義づけられているようだが、本当に誰にでもあるものだろうか、著者は疑問視している。母（祖母）の愛を求めるが

ために、結婚相手を選び、子育てをしてきた母。娘よりも母（祖母）の愛を選んでいた母。それに対し、母の「無償の愛」を求めていた娘。娘が祖母の死の事実を知ったとき、事件は起こったのだ。

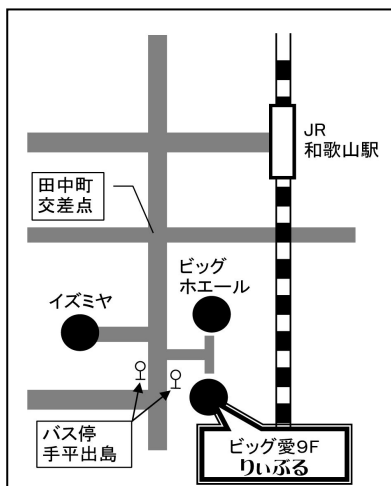
ここで起こる母娘関係については、事実にもとづく文学作品ではないので、一概にたくさんあるとは言えないが、実の母と娘だけに相談できず悩んでいる人もいるのではないかと思う。

(か)



※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ? 第7号 (2014年12月発行)

◇企画・発行 りいぶるぷらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】 私たちがりいぶるの図書室の蔵書を紹介しはじめて、2度目の年末を迎えることになりました。少ない人数の中なんとかやってきました。感謝です。私たちは土曜日を中心に集まり、会員制のHPで連絡をとりあって作業しています。執筆や校正、イラストを描いてくれる方を募集しています。興味のあるかたは、下記アドレスまでお問い合わせください。 e-mail libreplus@yahoo.co.jp